

新 おおさか KEYわーど 【第24回】

大阪文化を濃縮した街と歴史 先生のお便りはいつも青インク

肥田皓三先生が昨年2月に亡くなられて一年がたつ。近世近代文学、芸能史、大阪庶民文化史を研究された先生だが、昭和5(1930)年のお生まれで、大阪のモダニズムを肌で感じて成長されるとともに、講演会や研究会には、いつも和服姿でおいでになられ、物腰もやわらかく、古き大阪人のよき伝統を体現された方であった。子どもの文化研究では、毎日出版文化賞特別賞を受賞され、2005年にINAXギャラリーで『肥田せんせいのなにわ学 こどもの遊びおとなの楽しみ汲めども尽きぬ、なにわの文化』が開かれている。

コロナ禍の時代、肥田先生の業績を顕彰するシンポジウムも開催されずに残念であったが、このたび大阪ガス エネルギー・文化研究所(CEL)で座談会が開かれ、先生のお話を『再見なにわ文化』(和泉書院、2019年)にまとめた滝北岳さんと、学生時代、先生の講義を受けた明尾圭造さんのほか、私も末席を汚した。(https://youtu.be/NK1uzxGO9dEで6月末まで配信予定)

先生は、私にとって大阪市立道仁小学校の大先輩である。現在は統合されて大阪市立南小学校(中央区)だが、小学校の後輩として何かとご教示を得ることが多かった。

道仁小学校の歴史は古く、明治6(1873)年に南大組第十一区小学校として開設された。船場や天満と並ぶ“島之内”の東半分を校区とした学校である。

現在は堺筋から東を「中央区島之内」の町名で呼ぶが、それが地元で生まれ育った私には残念でならない。もともと“島之内”は、長堀川と道頓堀川、東横堀川、西横堀川に囲まれた広い範囲を指し、心齋橋筋や宗右衛門町、現在のアメリカ村一帯も含んでいる。南地の繁華街が含まれることで、商売の街・船場とは趣を異にし、どこことなく華やかで“はんなり”した地区であった。

道仁の卒業生には作家の藤沢桓夫(1904~1989)もいたり、終戦後、GHQに接收された大阪商科大学(後の大阪市立大学)の仮校舎が一時、道仁小学校に置かれた時には、学生時代の開高健も通っていたらしいと聞

いたことがある。昭和62(1987)年に大宝小学校、芦池小学校と統合され、跡地に市立の中央会館、島之内図書館、中央スポーツセンターが建設された。



肥田皓三先生。「上町台地 今昔フォーラム」にて

肥田先生の大阪市、とりわけ“島之内”への愛着は深く、平成30(2018)年の「船場大阪を語る会」でも「島之内の昔を語る」と題して講演されているが、“島之内”という言葉は私にとっても特別で、「ゆかりも深い 島之内/かがやく歴史 うけついで」ではじまる小学校の校歌が、半世紀以上を経た今もよみがえってくる。

ところがこの歌は、昭和39(1964)年に作られたものらしい。東京オリンピックが開催され、私が小学校に入学した年ではないか。統合までの23年間しか歌われていない校歌であり、なるほど先生が、あまりご存じなかったことは当然である。先生が愛された大阪の歌は「大阪市歌」だった。

また「戦前の大阪を代表する歌舞伎役者は、みんな“島之内”に住んでましたやろ」という先生のお話に触発され、私も「大阪春秋」第133号一特集 心齋橋・島之内(2009年)に随想「私と島之内 碁盤目になった“迷宮”」を書いた。心齋橋筋の商店街でもわかるように、地形的に“島之内”は平坦で碁盤状に道路が走っている。しかし、独特の文化的厚みが地域にはあり、本気でそれを探ろうとすれば、その深さと広がりには迷い込んでしまう、という趣旨のタイトルである。

肥田先生のお便りが、万年筆でしたためられていたことも忘れられない。それも必ず青いインクである。配達された郵便物に青色のご署名を見つけたとたん、この街の人らしい洒落でモダンな雰囲気は漂いだしたことが懐かしい。



往年の道仁小学校。「南区志」(1928年)より

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現象—』(創元社)など。